

Ⅲ 調査結果の考察

若者の「自立」をキーワードに、次の4つの方向からの考察を行う。

視点① 若者の意識と自立

視点② 家庭生活と自立

視点③ 学校生活と自立

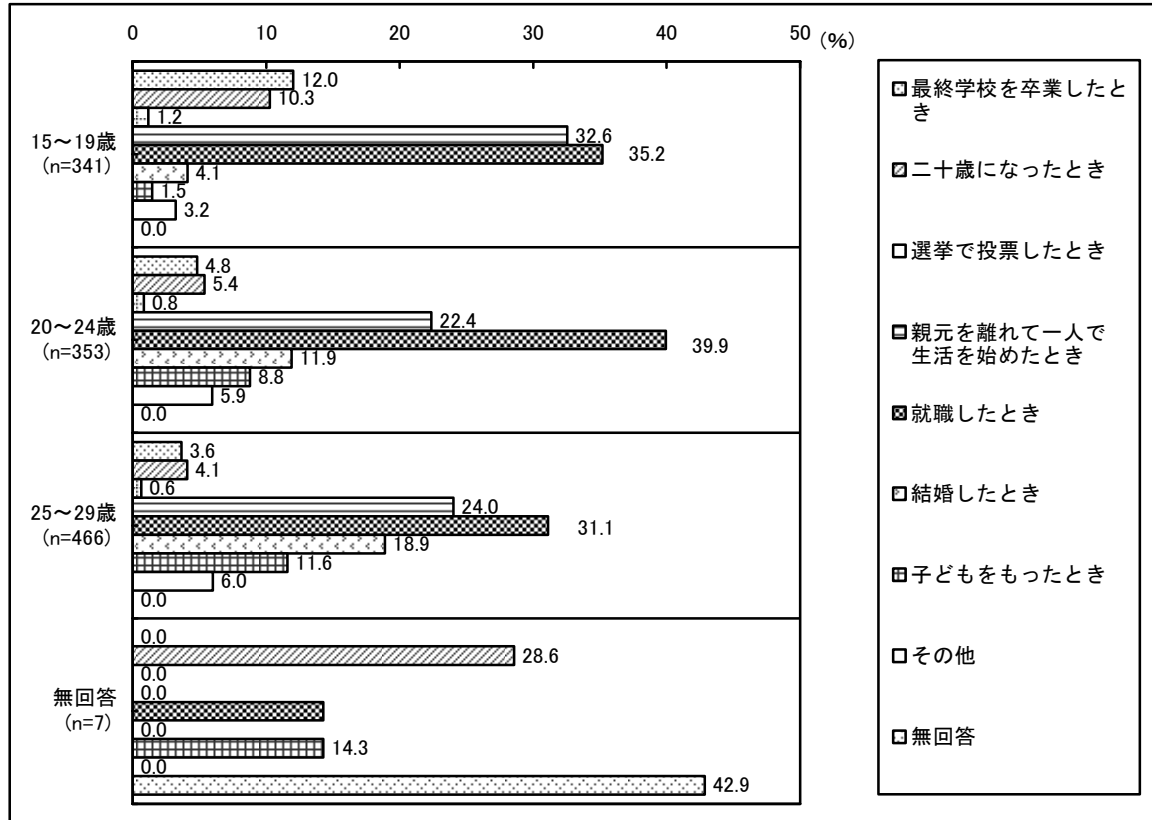
視点④ 若者の悩みと自立

*詳細は次頁から

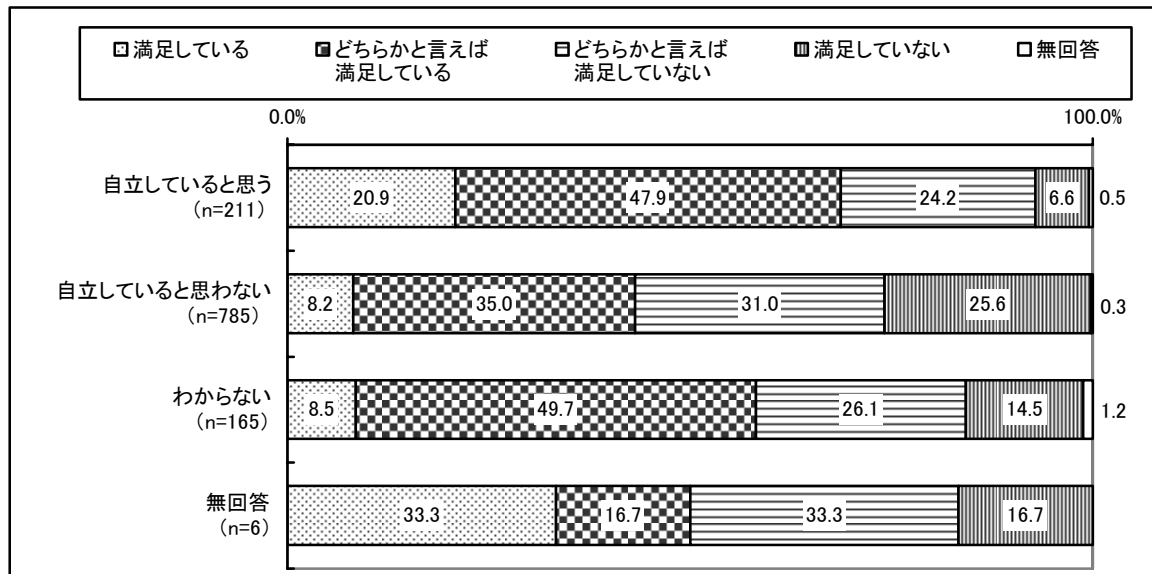
視点① 若者の意識と自立

若者が実際に自立（あなたは、自分が「自立して大人になる」と自覚する）を受け止めるのはいつか。さらに、その自立の受け止めと、「本人の自己満足度（あなたは、いまの自分に満足していますか）」との関連性で見えてくるものは何か。

ア 「自立（あなたは、自分が「自立して大人になる」と自覚する）」の受け止め



イ 「本人の自己満足度（あなたは、いまの自分に満足していますか）」との関連



左の表アで、「自分が「自立して大人になる」と自覚する」のは、「最終学校を卒業したとき」及び「二十歳になったとき」という選択が多いのは、二十歳未満であり、実際にその段階を過ぎてみると回答が半減している。

一方で、「就職したとき」はどの年代でも多い上に、年齢層が上がれば高まるため、代表的な回答である。

ただし、下表のように、実際に働いている率から見れば、むしろ選択率は下がっており、これは「結婚したとき」も同様である。

すなわち、いずれの選択肢も、自分が未経験の場合には、そのときが来れば「自立して大人になる」と思っているが、いざそのときを過ぎて、自立できたと思えないと考えられる。

下表について再度説明すると、10代後半の5.9%しか働いていない層では、「就職したとき」を35.2%が選んでいるのに、20代前半の58.1%が働いている層では、「就職したとき」を39.9%しか選んでおらず、さらに20代後半では80.0%が働いていて、31.1%（3割）しか「就職したとき」を選んでいない。

また婚者が多くなっても、それほど「結婚したとき」を選ぶ者は増えていない。

働く前や結婚する前は、そのときが来れば自立できると思っている、そうなった時に自立を感じられなかった証左である。

「親元を離れて一人で生活を始めたとき」については、この経験がそもそも少ないため、憧れは強いままなのではないか。

◇表 自分が「自立して大人になる」と自覚するときは？

	「一人暮らし」している人	「親元を離れて一人で生活を始めたとき」と回答した割合	「就職」している人	「就職したとき」と回答した割合	「結婚」している人	「結婚したとき」と回答した割合
10代後半	5.0%	32.6%	5.9%	35.2%	0.0%	4.1%
20代前半	19.0%	22.4%	58.1%	39.9%	7.9%	11.9%
20代後半	12.9%	24.0%	80.0%	31.1%	33.0%	18.9%

《上記表の説明》

一人暮らし：「あなたは、現在誰と一緒に住んでいますか」（問4/6頁）で「一人暮らし」を選んだ割合であり、一人暮らし経験者はこれよりは多い。

就職：「あなたは、次のどれにあてはまりますか」（問5/7頁）の選択肢（正社員・正職員、派遣・契約社員、アルバイト・パート、自営・自由業）の合計。離職者等を考えると、就職経験者はこれより多い。

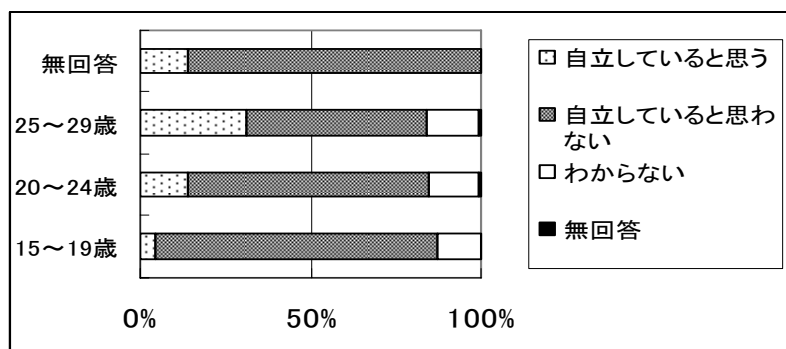
結婚：「あなたは、現在誰と一緒に住んでいますか」（問4/6頁）の同居人で配偶者を選んだ割合であり、既婚者はこれより多い。

40 頁の表イ「本人の自己満足度との関連」では、自立していると思う人でも 3 割は今の自分に満足していない（「満足していない」6.6%+「どちらかと言えば満足していない」24.2%）。自立していると思わない人だとこれが 55.6%とかなり高くなるが、いずれにせよ、満足していないという回答は、向上心の現われの場合もあり、満足度が上がりさえすればよいというものでもない。

客観的にみて満足していると思われても、本人がまだまだ成長したいと強く思っていれば、いまの自分に満足することはなく、一定の「満足していない」という回答はむしろ望ましい。

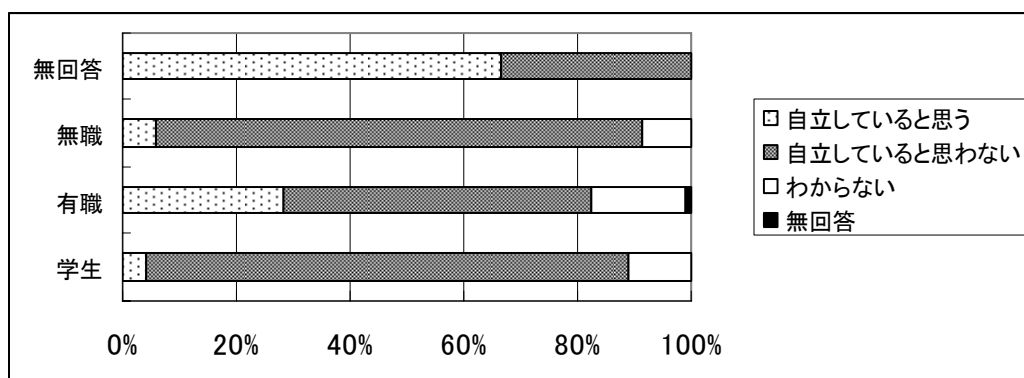
むしろ、自立していると思わない人で満足している 43.2%（「満足している」8.2%+「どちらかといえば満足している」35.0%）が本当にそれでよいのかと、問われなければならないだろう。

【参考 1-1】年齢層別に見たいまの自立の状況



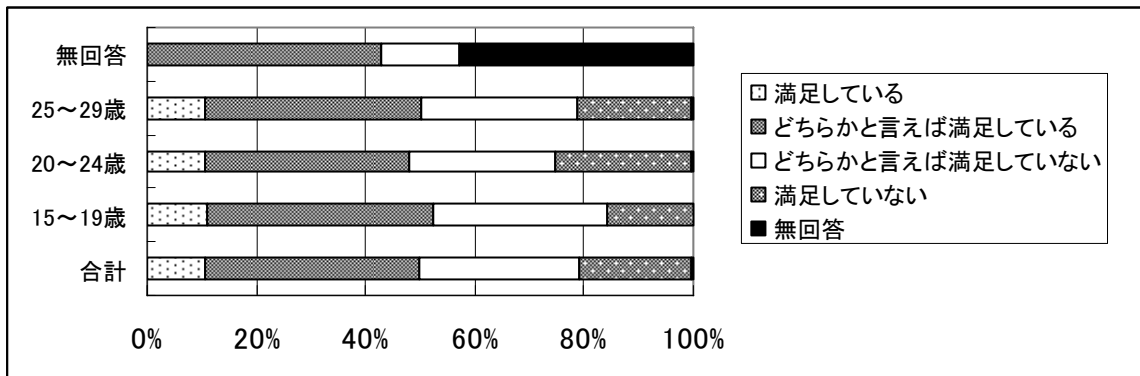
※全体結果（参照 12 頁「②自立の状況」）では、「自立していると思う」人の割合は 18.1%を占めた。さらに、上記年齢層別に見ると、年齢層が上がるに連れて「自立していると思う」人の割合が高くなっている。ただし、25~29歳で「自立していると思う」人の割合は 3割にとどまった。また、「わからない」人の割合は、各層とも同程度である。

【参考 1-2】学生・有職・無職別に見たいまの自立の状況



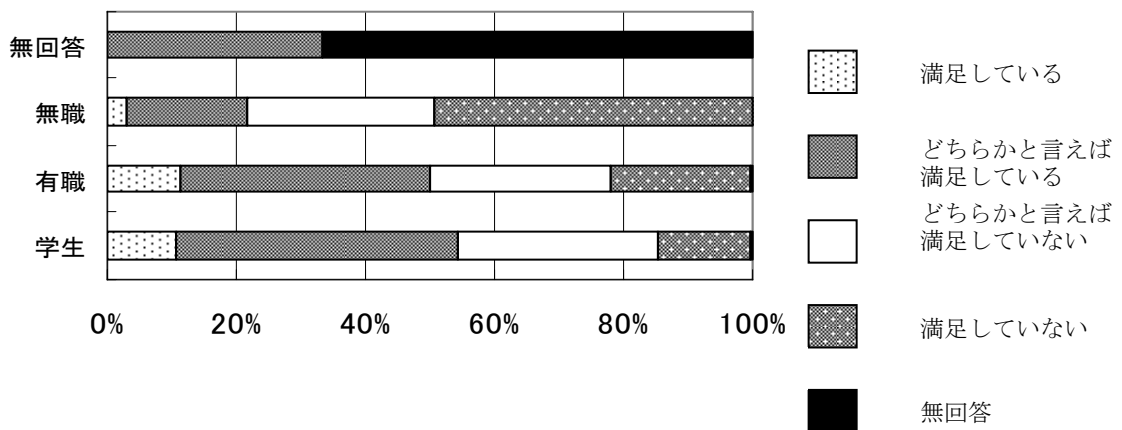
※学生（現在高校生～大学院生「7 頁参照」）と有職（正社員～その他「7 頁参照」）との自立の状況では、有職者により自立意識が高く約 3割に達しているのに対して、学生は 1割に満たなかった。学生のほとんど（8割超）は「自立していると思わない」と回答している。しかし、有職者の 6割近くでも「自立していると思わない」と回答している。

【参考 2-2】年齢層別に見たいまの自分への満足状況



※「満足している」から「満足していない」までの分布は、各層同程度の割合となっており、特定の年齢層だけに見られる特徴はなかった。全体結果は、10頁「②いまの自分への満足状況」を参照。

【参考 2-2】学生・有職・無職別に見たいまの自分への満足状況

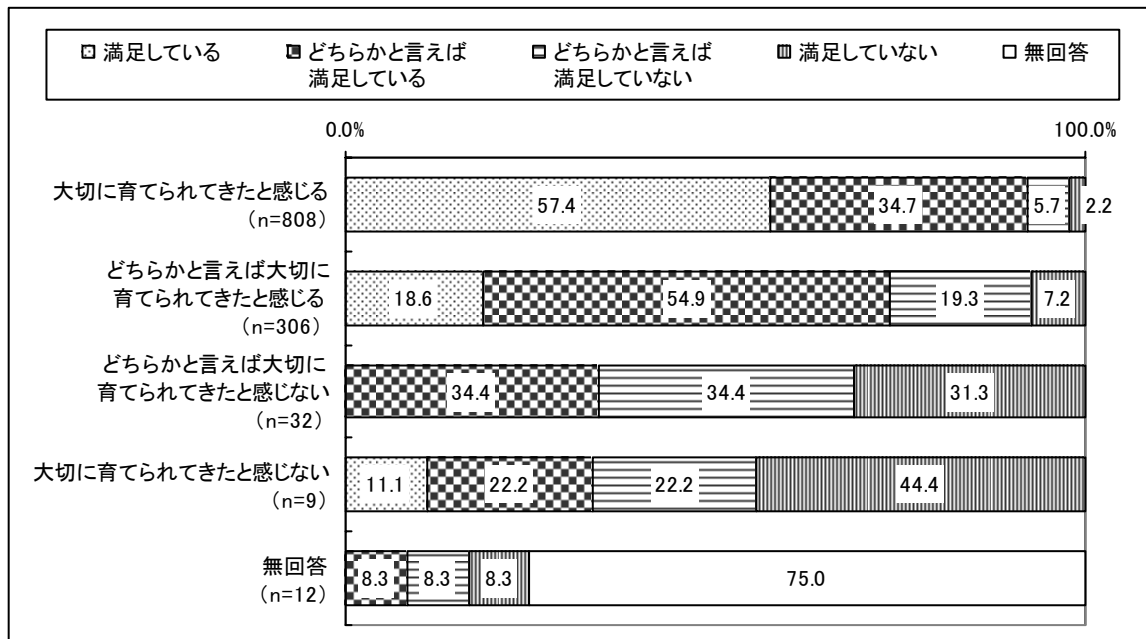


※学生（現在高校生～大学院生「7頁参照」）と有職（正社員～その他「7頁参照」）との満足状況には、大きな差異は見られなかった。

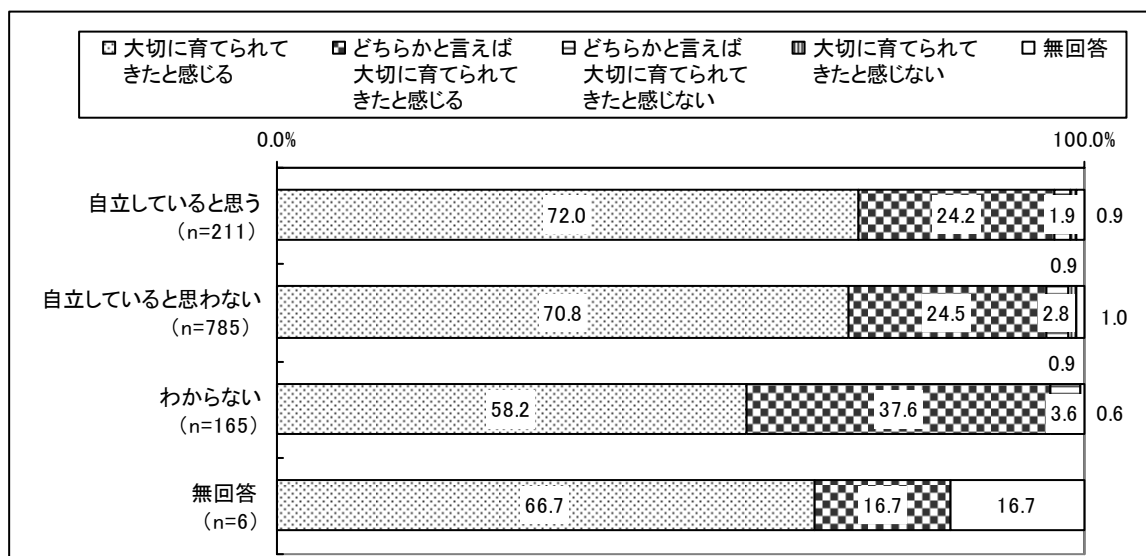
視点② 家庭生活と自立

若者の自立（「あなたは、自分が自立していると思いますか」）の意識と、本人の成育歴の中での、「家族とのコミュニケーション（会話やふれ合いなどを振り返って）」や「家庭環境（あなたは、これまで家族の中で大切に育てられてきたと感じますか）」との関連性で見えてくるものは何か。

ア「家族とのコミュニケーション（会話やふれ合いなどを振り返って）」の受け止め

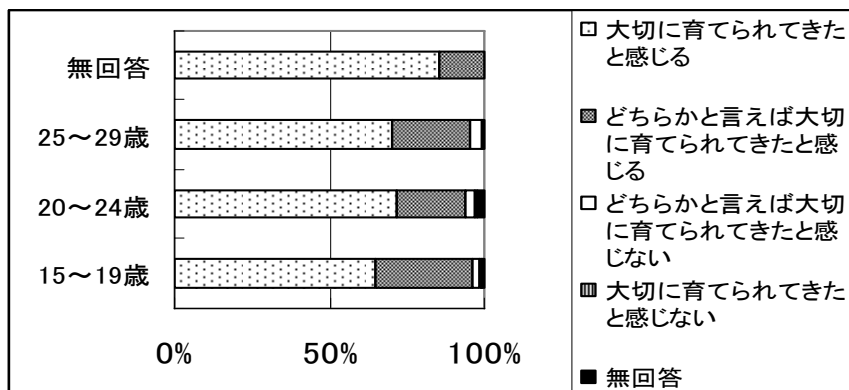


イ「本人の家庭環境（あなたは、これまで家族の中で大切に育てられてきたと感じますか）」との関連



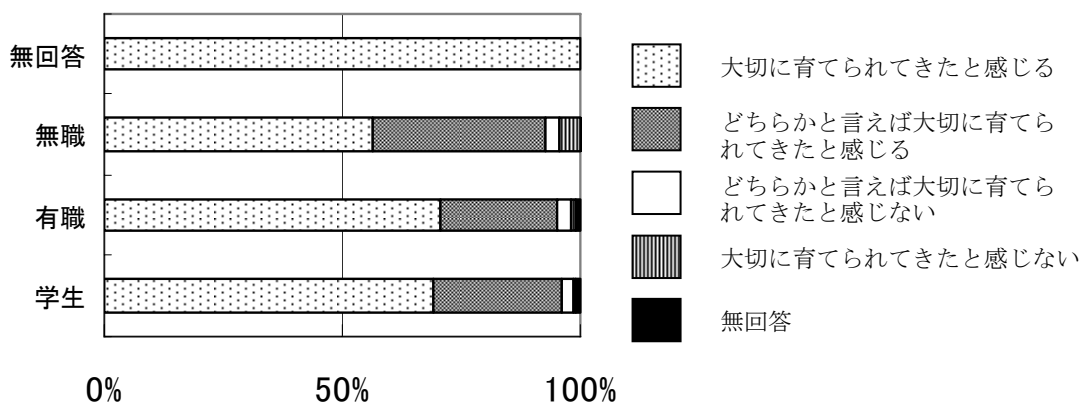
問9（「あなたは、自分が自立していると思いますか」）と問16（「あなたは、これまで家族の中で大切に育てられてきたと感じますか」）、問9と問17（「家族とのコミュニケーション（会話やふれ合いなど）を振り返って」）の回答からは、自立していると思うか思わないかと、家族の中で大切に育てられてきたと感じるかどうか、家族とのコミュニケーションの満足度については、明確な相関関係がなかった。というよりも、回答者は総じて、家族の中で大切に育てられてきたと思っている（「どちらかと言えば大切に育てられてきた」をあわせて95.4%）し、コミュニケーションについても満足している（「どちらかと言えば…」をあわせて84.3%）。家庭のしつけは「ある程度厳しかった」（49.4%）か、「あまり厳しくなかった」（28.4%）が、そのしつけを感謝している（「どちらかと言えば…」をあわせて90%弱）。

【参考3-1】 年齢層別に見た家族とのコミュニケーションの受け止め



※「大切に育てられてきたと感じる」から「大切に育てられてきたと感じない」までの分布は、各層同程度の割合となっており、特定の年齢層だけに見られる特徴はなかった。全体結果は、21頁「①家庭における育てられ方」を参照。

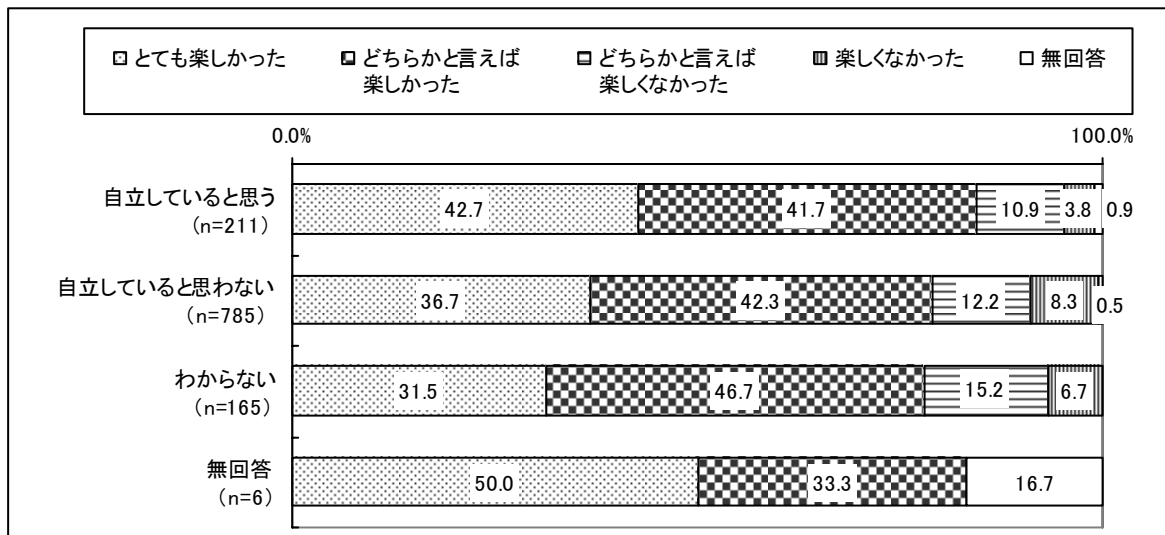
【参考3-2】 学生・有職・無職別に見た家族とのコミュニケーションの受け止め



※学生（現在高校生～大学院生「7頁参照」）と有職（正社員～その他「7頁参照」）とのコミュニケーションの受け止めには、大きな差異は見られなかった。

視点③ 学校生活と自立

若者の自立（あなたは、自分が「自立して大人になる」と自覚する）意識と、義務教育における「本人の学校生活（あなたは、小・中学校時代を振り返って、どのように感じていますか）」との関連性で見えてくるものは何か。

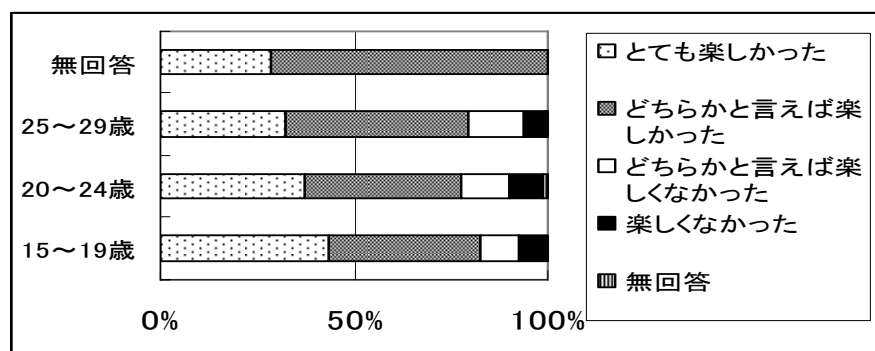


「小・中学校時代を振り返って、とても楽しかった」と答える割合は、「いまの自分に満足している」（問7）人ほど、「自分が自立していると思う」（問9）人ほど、「家族の中で大切に育てられてきたと感じる」（問16）人ほど高いが、これは一般的に想定されることである。

一方、同様に「とても楽しかった」と答える人が若年層ほど多いことについては、どう説明できるであろうか。小中学校時代が近いことによるものなのか、人生経験による変化が生じるものか、あるいは学校自体が変わっていることによるのかなどについては、追跡調査や更なる比較調査によらねば分からないことである。

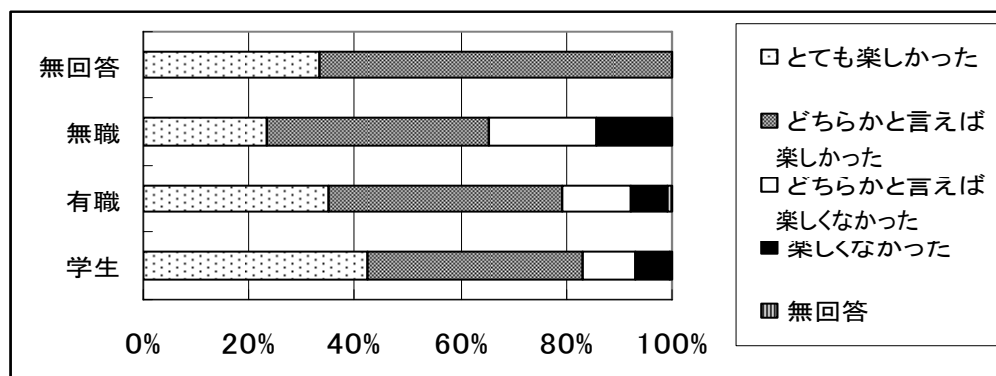
また、「どちらかと言えば楽しくなかった」（12.3%）、「楽しくなかった」（7.2%）と回答した約2割の人たちについて、学校のあり方など、今後、なんらかの検討が必要となろう。

【参考 4-1】 年齢層別に見た小・中学校時代を振り返った感想



※「とても楽しかった」割合は、年齢層が下がるにつれてやや高くなっている。ただし、「とても楽しかった」と「どちらかと言えば楽しかった」を合わせた割合は、各層とも同程度である。全体結果は、26 頁「①小・中学校時代を振り返った感想」を参照。

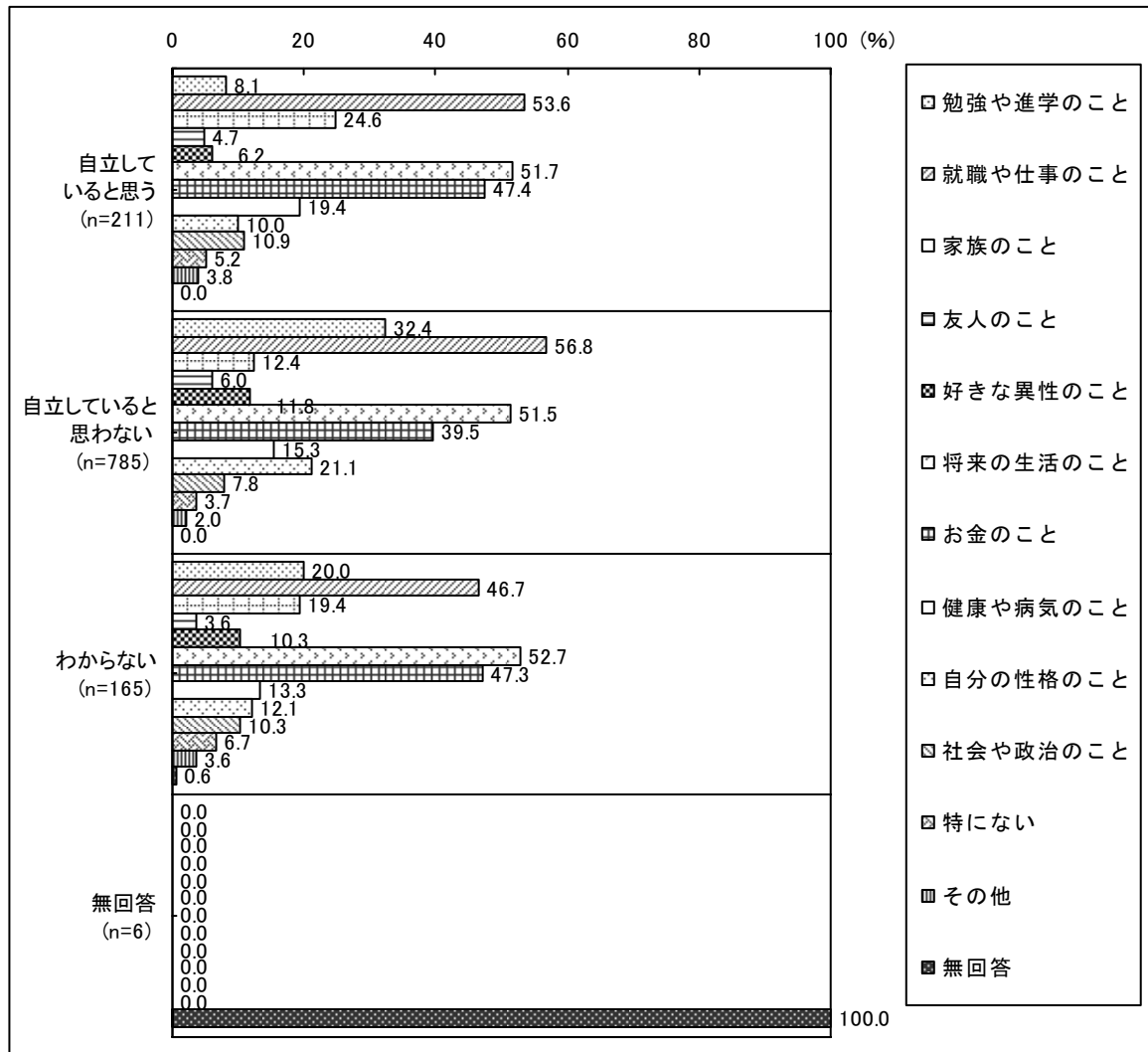
【参考 4-2】 学生・有職・無職別に見た小・中学校時代を振り返った感想



※学生（現在高校生～大学院生「7 頁参照」）に「とても楽しかった」割合がやや高い。ただし、「どちらかと言えば楽しかった」までの割合まで含めると、学生と有職（正社員～その他「7 頁参照」）とに、大きな差異は見られなかった。

視点④ 若者の悩みと自立

若者の自立（あなたは、自分が「自立して大人になる」と自覚する）意識と、現在持っている「本人の悩み（最近のあなたの悩みや心配ごとは何ですか）」との関連性で見えてくるものは何か。



最近の悩みや心配ごとの上位3つについては、問9（「あなたは、自分が自立していると思いますか」）における自立していると思う人も自立していると思わない人も同様である。すなわち「就職や仕事のこと」（自立していると思う人のうち 53.6%が選択：自立していると思わない人の 56.8%が選択。以下同様）、「将来の生活のこと」（51.7%：51.5%）、「お金のこと」（47.4%：39.5%）となっている。

そのほかの選択肢は、いずれも選択率が低いため、明確な違いは現れない。違いがあるとすれば選択数で、問14（「最近のあなたの悩みや心配ごとは何ですか」）は3つまで○をつける回答方式であるが、自立していると思う人は平均 2.45 個の○をつけ、自立していると思わない人は平均 2.60 個の○をつけている。つまり、自立していると思う人の方が、悩みが少ないということである。

【まとめ】

本調査全体を通じて、驚くような結果がでたわけではない。ある意味、「あたり前」の結果であった。となれば、若者の自立を劇的に促す施策というものもそう簡単にあるわけではなく、地道な施策実施とその評価・改善の繰り返しは避けられないであろう。

アンケート調査の限界（量的調査は容易であるが質的調査とその分析は難しいこと、回答しなかった人（53.3%）の意識こそ聞く必要があるのではないかと想定されること）をふまえながらも、問 30 の自由記述を活用しながら、「自立」とは何かを検討し、総合的に、個別的に、施策を進めていくことが求められる。

新潟大学大学院 現代社会文化研究科 准教授 雲 尾 周